比況集

伊地知文庫
文庫20
186

文庫20
186

連詩比況集

伊地知氏書冊

夫連歌は哥より出て其感情亦たり深し
形し水より出るものあらんこと疑ひなし
是まらりて是も情も四徳一味にして色を形色
賢なるも愚なるも姿を同じて色徳をふ変ず
宗祇禅師といつる人ありき仏法をうつし
教公の風をあふき縁なりしを道をつま
すれかんをおこし侍る事形先達
まるてらいうんや後学よおわてをやすく不敏
なりといへども世道を欲き志をしるべ
庭訓をうる侍り或ハ九重の花を去ぬむ

なくいまだ人をあはれみある時は十里先
浪の上に猿声哀を残ぬ志ふかき人と
成るべしとうけたまはりて実に然又書
籍乃人情内に志厚く古おのれ富貴一切
志なくてよくしるすべおもしろく面白くこそ
うるはしき道をしるべしとよませてけり
うるはしきことを学ばんと志めしまへと此あや
ぶまるうつくしく千分の一ばかりなりとも
き智者以譬喩得解といへる諸なる式
老乃波に多くうるはしく今を恵ばおもへ
ば天にうるはしく高し海にうるはし

多角にして此道ばかりして来れり作る
作る舞うたふ河と詩と書に深き
作る毎に筆をうつしてし
一巻とおもしてあり人にこれを志のあり友
人是ばかり一筋にしてしかも別に学問集と
なほく作生おもへしといへる毎生也
なるべしふしてあり知人乃ふかきふかく
きれ愚純志人にふかくふかく是をとてのるぬ
と毎やとにひ作るを志うふ

目録

一 蓮乃茎
二 五尺の菖蒲
三 秋の柱
四 淀川
五 乞食袋
六 蓮茂木
七 庭草
八 雲雀巣
九 二疋の鹿
十 合鷹
十一 里之道
十二 [illegible]
十三 階
十四 錦綴文
十五 人参彫
十六 四重目
十七 分限
十八 有毒
十九 むくの葉
二十 下緒
廿一 錦の端
廿二 首の犬
廿三 西施
廿四 巾袋
廿五 猶子
廿六 ゆうあ
廿七 扇の大小
廿八 三子乃賢
廿九 義乃外
卅 [illegible]越
卅一 掛繪
卅二 古殿の彩水

廿三　紙衣戸金
廿五　城責合戦
廿七　嵩の糸と水
廿九　勝月殺人
卅一　商人乃ゑ衣
卅三　苗をぬく
卅四　下女猿子
廿六　堀瘡
卅八　袋の緒芋
四十　大佛の答刺
卅二　大的

一　蓮乃莖

同云連句をなす事いと拙なけれども一句あの句ゆゑ思ひて〳〵なすべしと云ふ又おもひ付たる句〳〵なすべしとやいふ　若前句ゆゑ思ひ付たる句はるもとも那也て志うもはるの句ぬやうに思ひ付て連句をなすべしといふ如こゝろ付ゆゑをいうべし　さて句〳〵上古ゆゑは別欲しりて欲一首を引分上下乃句ふなゝ作るや是ゆゑ拙なるゝ〳〵て志うんとなゝて蓮のくき切〳〵にしてこれはるれやゝ〳〵て志うもを糸結る事歟

ちらく折をのつま前句此心紙をはらへ蓮乃
茎を切ることあらん縁語とひらへ寄合を
つきちさめるは糸ぬつきあるかことし

二　五尺菖蒲

連哥の仕立ハ五尺のあやめをうけらん
のなかゝしなるへし本よりあやめもきよらかなるは
そのまゝ名をうくまても一点もにこる所もなく
なかくのことし且も水はいつもゆくと
しく長くうこきとこかるゝ所もなくたちて更
らんをえてこうへき

三　椛乃はしら

問云連哥ハ前句あるをいふやうにとり
宗へくや昔歌の字取字て句を付
る事なし一大事や連哥ハ又あるとるふ
立字不立字を分別をなす事詮や学へし
分別ぬ人の宿所にけりてとまりなむに俄なる
事也未ざん時ハ必方角を失ふ旅人志らん時ハ
坐見おいらん柱一本思ひ出して其柱にて
付て様よりとつき上座下座をわきまへ
東西南北をも知へし左らく前句の耳にたて
る詞と聞えける字の分んを能く分別して其上
より一句の心を思ひめくらして付る事肝要也

四淀川

同會席より帰りて人は及ばれたるもの
いへき事なり　答夫人の利純よりして上
下流をて流れ四五品にして上純より
利根なる者あり上は利根筆ふるして庭の純
なる者にて上下ともに利根より上庭ともに純
成者を何とも名や山川なるを岩より世の秋
て言もるるく名庭ともやきものしにくく田の
末里の奥なるの河は上も庭もなるべき
蓮流にえなるしの如なるや にくく淀川は上を
名やうよりてもも名庭はきやなる川なり

連歌師の別庭名は此川のうるはしく
まるきや緑なる上なる月時うて年を
はるく利根筆より又えそうんも言けしな
さはしくええて如まるうたはしく何なるおる
そうふみて世界流はうふる色流はうるう
人庭は越庭なうるんうる流思ひうふみて
人さまなるく滿庭より又おうきまぬやう
より人流なる

五　乞食袋

同云連云七名人人は学文をあるもの
緑なるきの又緑月緑学をも人けは緑へきや

蓋文諸道ハ一芸を知奇道を法道成知と
いふ事なり内外を法ふ成知さるべき人ハ先
別〳〵見成書籍を内〳〵考へ事ハ賢
人説をきゝ古今友秋を以運轉紀業
黄帝の稱をもとて切をもとて也常記意
るさを形〳〵阡陌縱横に道を始めて旅人
の悲をなげかしむ之を以稽古の道よりてハ影
宗密宗内典外典武勇武藝芸良(ヨトコ)農史に
ことわさ南〳〵も者てゆに見聞覚知〳〵人
こゝ様を記憶を〳〵法を奇道ハ六義十躰を
也ふれを仰体仏義を学ぶ成ハ〳〵

古人も十躰を具そ一躰也をなすまゝ又仏
るといつを宗初の風貴成人うけ濃躰をもゝと
思ひ専ひ内成人を味をかゝひ様を人教
乃仮よもの和漢の古事をふまゝ
賢聖教説を学ぶ十躰行也も拾ふ人中を学
ひ拾〳〵前自の似合〳〵人有を以也〳〵用を立
角を事〳〵肝要也をもゝ食袋ハ二例
拾ぬるを内也也乞時ハ何をもきゝ
もゝ人教ふふゝに成ゝて何ゝ一例
袋に取納〳〵我方を拾りて用を法〳〵之を多て
文用奇道の学文道を同しうゝ

六 逆茂木

同云連ゝ寄の志てゝゝん人をいうやうゝんを拵る
へきや 昔志て角ゝん人ゝを或ハ新勾或ハ古事
なと志ゝゝゝゝ初ゝを乃ゝゝゝ上を色と失
ふ事ゝあゝんハ移ゝ間ゝをめゝゝゝこの
あゝいる付ゝゝゝゝ初ゝ伝道ゝんとゝを上を
ゝは又変迷れ勾と志ゝゝさゝん学ゝ角と
へゝゝ生ゝゝ道ゝ伝ゝゝ引ゝゝゝゝゝゝ角
らん伝先ゝ行て生道義本伝ゝりの角ゝゝ
志ゝゝ侯の人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
てゝゝ神ゝゝゝゝゝゝ悲神のんゝやゝゝゝ

なゝへゝ新新勾ゝ雑勾と付ゝゝ（古事ゝ
古事ゝを志ゝゝゝて人乃失伝ゝゝゝ他の庭
をゝゝゝゝふて伝ゝ

七 庭草

同云稚古ゝ伝ゝいゝ拵ゝ作ゝゝゝゝ 昔云
加多人乃通ひゝゝゝゝゝゝ庭の中石ゝゝゝ
角ゝゝ生ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ作ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ根ゝゝゝゝ菜ゝ草ゝゝゝゝゝゝゝゝ
道ゝ学ふ者ゝ又人ゝ中ゝゝ立ゝゝハ同学
同信仏ゝゝ心軍ゝゝゝ押ゝゝゝゝゝゝ

人毎に学ぶべし我はぬるぬるしてぬるぬるも
学ぶべし一ちをもて人を儲くべんと角なる
へきなり

八　雲雀巣

問云連歌を花とたとへ実をたとへ侍る
おうしさ事なる又歌実ばかりなるぬつさ
なるや答文宣王云君子務本立道成と
云て詩道をうしなる侍也又此言肝要なて
毎とに雲雀といふ小さ生物陰り
巣をうの間へ〳〵あるを見て雲ふうの里
ひまあるを見て侍也是虚空をけるを

なく物ハをのう詩をうくるをしてハふ叶
とてうり哥道も花実ばかりを主実
歌道と云て又花の方ハ色をかをよのなる
うたとて実をぬきくるハ古巣にうくはることと
なるすおのもうるわるしハ花うけてんるを
をのもんばもせ匂ひるをおのも匂ひ出もやう
まいるへきハ此道や志ろれハ〳〵一向ち不可
志をかり〳〵実をたてハ道の外なる
よく〳〵思ひ知へき事や

九　二疋の鹿

問云　老者ハ一箇夫をもて二の庵を留と

ナハいうやうの事やうん　昔云一の矢うて
二ツ所をうる事　をを意のつきなれ角
さうくハ前なる事出来ん人ハ自ナ七字ハ
中ゆ別くのうをわれ自ん人ハ何をやうん
耳うう角うくうくし其ハ一事をうりく
おなるある二ツ所自ハ自ハ自おうすやうゆてふへ
ふうやや是豈上ゆ也ハつきなうやうれハ
首宗砌法師角をいうくうを云ウ伐し給し
ゆ給ゆるれハ満足皆ゆ右ハし師ゆうりやあ
りく行助法師豈ゆ自ハ自ハ宗砌
ナうるゆハ法尊別庭ゆ住ゆ也く

自給ひくうゆるうくありしゆり芝角豈と
云事仏豈ハなり豈伐自ハ角もゆる
法宗又豈ゆい事くくうゆるれを以くくと
ふくもうく仏西ゆなり道を以く覚知を
へし豈ハ一ツ矢のうくし伐ゆとくくハ
二ツ所ゆ知ふし

十　合聞

初ん人ゆ人子ゆなるのハウ数を人ゆおうくを
指合も覚ゆ伐上ゆ也ん而をもわき角へ者
ゆやくゆる角く懐宗ゆ者くを伐ゆ
うくハ所を来ゆ志くゆん人うけゆる也

さて〳〵鳥乃方ゟ成ル程ゟ雪を踏て
海ゟ其中ゟ白さ〻ゟ出て拾ゟ〻位ハ
しくかへるゟ出ゟ雪ゟ成ル事ゟ
さ事し和人ゟ人ゟ人ゟなり

十一　里乃道

同云連歌ゟ句ゟ歌書なゟ之ゟハ
ゟ人ゟ成ル拾へ〻ゟや　答書籍を見之ゟん
ゟは或ゟ一部或ハ一巻ゟ内を紙横ゟ又
見ゟ成ゟ先ゟ成ル詰ゟ奥ゟ之
ゟ和ゟ〻ゟ成ハ部数ゟ有ゟ成ル積智
なゟ角〻一部乃内一部ゟ成ル有ゟ〻

人ゟ拾おゟさんゟ成ハ又ゟ成ル事ゟ〻し
角ゟ〻ゟ京へ上ゟ〻ゟんゟ人ゟ者ゟ生ゟ三里
ゟ拾ゟ成ゟ海ゟ道ゟ成ル角ゟ〻ゟ
海ゟ山乃内ゟ者ゟを見て唱ゟ〻ゟ
せんを思ゟ人ゟ内ゟ〻ゟ〻ゟ〻ゟ退屈
ゟ成ゟ有ゟ〻ゟ大概又ゟ〻ゟ
ゟ里乃ゟ拾ゟ和ゟ成ル有ゟ何ゟ
ゟ成ゟ〻ゟ角ゟ〻ゟ和ゟ
ゟ〻ゟ成ル引ゟして又ゟ物ゟ
ゟ拾ゟ思ゟ成ル事ゟ

十二　簾

文麗を一篇〳〵別〳〵に作をあつめ
ぬるを麗といふ言葉一句あれとも下能く
吟味合〳〵ゆをとろへてはまの出入なきやう
よはく〳〵へさやと上より行へき詞を下よりと〳〵下より
行へき詞をとるをきぬぬ一句こそ
是て年よりは只ふるうてはしめくさきの
なり又てまのうちん志てまらうて上つけ
お抵かくのたらし　　一有ぬしも定盤星をもとの
こゝなへこゝにハ言葉三つけ出る宿乃
さひしさに人こそこねれ秋の来るより外
言をもいく〳〵伯命をしてをあ人こそこねね

と云れハ名れと爲へりまと人こそこゝん
孫と云て云ひあるるれハ上るうあを
して秋を来るりとをめこへし

十三　さはをしし

連句ハさはをめわをのたくなへし
一句を秀句をもを記一句ハ取成連句をも
又十能乃門仔秋をもつ祈つ一句く
して能く仕是て仕ほをちくしく
何の能をも似合こゝ為事乃出きこゝん
明を合〳〵をを爲きなを

十四　錦綴文

文篇を一篇〳〵別〳〵に仕立てゝ篇とゝ
ゝ句を篇とゝ句とゝ下絵〳〵
吟味合〳〵ゆゑをろ〳〵てはまゐ入なきやう
よく〳〵へきや上に行へき詞を下に下へ
行へき詞を上をきぬ〳〵ハ一句〳〵こゝ
ろて年よりとゝ口ふ古りて此しゆくさの
なり又てゝまたの句をゝてゝらりて上つけ
下へ付る事有ゝ〳〵宝盤星をもとの
〳〵なへ〳〵ハ文庫ゝつけ出る宿乃
さひしさに人ゝてゝ又ね秋ハ来りり
ゝをも付〳〵句を原ハ人〳〵てゝね

と云れハ月と梅へりまと人〳〵てゝ
孫とゝてゝ云ゝ〳〵ゝ月ハ上ゝりあハを
〳〵て秋を来りりとゝめゝへし

十三　さゝ花を

連句ハさゝ花ゝをゝ花のさゝなへし
一句を秀句をもを紀一句ハ歌成連句をも
又十能乃月付秋をもゝ一句〳〵
〳〵て能〳〵付是てゝほをゝ〳〵
何の能をも以合ゝ句事乃出ゝ〳〵ん
明を合〳〵ゝ梅をなを

十四　錦綴文

今春ゆきかへり必しもよき色彩さんと
おもふこころ捨て一段のいかつき事出来
ども自分好句をのこさんとしてこゝに
こゝ捨てはよきこゝへ絵を作りて俗へ
こゝのおもしろき句を志ゝしこゝる事
又あしき事を俗へこゝへこゝいおのゝ自性
ちんこゝはこゝ思ふへこゝ

十五人乃うは

問云上品下品おのゝ比丘成仏する事
こゝ金言出来下品ハ悪人の事
斗をこゝ有るかこゝ

問云上品ハ善人乃
うるはきもいやしきも貴も七宝乃
こゝ二眉なるひゝ事かこゝ
ハ英月ゆき少あしきと新ゆき地大小
也短と父の白と黒と同乃あきやこゝ耳無の
ゆきゆきこゝなるこゝ連音又足こゝ
こゝ百十七十四の文字数もこゝ
部論こゝも同しおこゝ仏者ゆきやこゝ
こゝ上古こゝ上品と下品こゝ句の多ハ又ゆる
こゝ上古こゝ下ゆきこゝ事ハ
こゝ書会を成しのけ本称ゆきこゝ

しん人は様よりうへさ国を望さ侍るなりこゝてよ
有毋き鼻紙ふいまるしこうるうるくしく
又ゝくしき事いかゝうりや

十六 四重目

問云連音を稽古せんよ和人ゝよりほんゝよる
んまく度ゝ人を拾習へさやゝん 答
法道よ渡て或ハ三重四重の人ゝちゝ天
台宗なゝまゝ教行説三重秘伝を立う連
音をゝへて四重乃法流ゝ家和人乃
時をいふも人ゝ拾ゝ和歌をんよけ
ゝ今ゝはるゝ拾ゝ侍ゝ

ゝてゝ人ゝ拾ゝ侍ゝ入ゝ侍ゝ花ゝ侍
うゝゝ拾ゝ時よ似ゝう文ゝ道ハ貴ハて
聖ゝ拾ゝ侍ゝ人ゝをゝ人ゝうゝよりゝ
ゝゝ恋ゝけゝてゝ侍ゝおゝ
ゝ拾ゝ思ゝてゝるゝかゝ侍ゝ
歌乃拾ゝうゝ足て文貴拾ゝ侍ゝ
和よ人ゝをうゝハゝ
皮肉ゝ色骨よ成ゝ侍ゝ言ゝ
出ゝ道よゝうハゝへゝ孔子ゝ十
有五ゝゝ志学三十ゝゝ立四十ゝて
不惑五十ゝゝ天命ゝ知六十ゝゝ耳順

七十あまりに従て欲心不除就といつり　語金

此心よおろし

十七　分限

なかれかくのめ
ハうしへぬあめ

成うしし主ものもつ又世間道を行つめて
前白の出さうんよ過ひて行るあるを廣
才なりてふれぬ道や有よ詩をも文学学
ひ又佛法世法をも廣く学して記者や

十八　有無

先連ものを先んずるに前白を能く動舞を
へし行ふ業しても字有ふへうにうんをい

心をつゝやして業やんと途なるへし又
よる事のけうん有白をも毎へをして大るよ
付るさんるも無念るへし初心の時世境
をさうんと思ふをも在の好士の頭をうし
ぬけて業せむをハ前白とうへし
ちく行るるき有るりうをもくうにし出さんをハ
行し沉思ととも苦合ふて有と心深色し

十九　むくれ業

史細工をる人の先業おるうる本紙学て
て重て行おをして行るうんなるけて与紙
又うくあるに先うくにをうして修むくれ業

七十あまり従有欲心不能説といつり　語金
世にもおろし

十七　分限

夫人にんはなるおろかもの貴なるねハ万事
成うるし　をのずと又ハ世間を知つめて
前句の出さうんを酒ひて作るおもしろ廣
才なるてハ有れぬ道やあるを詩をも文章学
ひ又佛法世法をも学ぶ学して記者や

十八　有無

先連句をせんやとおもふ前句を能く動舞を
へし　仏の教しても字有ぶへうりんを

仏をつゝやしして教せんと途なるへし　又
よる事のけんかをも毎へをして大るる
付るさんるも無念るへし　初心の時世境
を言んと思ふを庭の好士の頭をうし
ぬけて教せむをハ前句とするへし
ちく行るるを有るりたるをしたるを出さんを
何と況思ふも苦合ふて言と仏得色し

十九　むくれ業

夫細工をする人の先芸おうるる本紙やて
て重て行おをして次ようなるけて与成
又うくあるを先をを使ひて怪むくれ業

まてみうら作りや連歌の地も高く大切の
のる所なしてい不可叶いうあも初めて下を
をさうへ〳〵ゑめ高うもいかゝ〳〵さ何
の上下をも出るよれうへ〳〵いうも抱へ
きをめや当世の好せかゝ〳〵耳なれ
ぬ詞なく我所ふる仕出す事ハ芳野の
海にて重〳〵んのこと

二十　ちを

敷白紙先三ぬ抱　紙仁ハあらをへていを
さけをハ刀乃作り抱るをへをやこの作の
結梅なふ法をうをみてさけをんとをハ似合

又ハ引き刀ハ唐糸おさけ結も似合ゆ
如を敷白ハ俗〳〵似合う事を能く思ひを
うをて付へし又先三ハ抱ハ高しうを
して高もをる抱白似合ゆ我引せて
のひゝるせんかと行安なく〳〵刀乃をを
ハ唐をうんうを刀ハ乃異ハふる抱
うれをちしをへて又ゆれあし口服を下結
なり刀ふをせ作ひをうひをゝをやを如世
敷ハ抱を吋節をうを作ひをうふをゝをや

廿一　錦のもを

問云当世ハ人のハ源氏を一部ハをを

角角くやうこの事は前句なるべし出来
らんかしとへらるるとかはさやうにうけたまは
りやいかにとそうりう全部ゆるしたまはり
てそんしうの発句は千人万人の中ひとりきき
るべしとへる御のさまいかにもとも守り
かたくちくふも成らうしに原氏和漢ふし
句一ツ初りしも四合うる事出来しん
はなとうけたまはるべきやうやうの無智識
ゆえ不了簡

サニ　昔乃犬

問云同事なれども仮名やうにうけたのか

ちる事なりや芭蕉の上句の和也詩まは反歌と
はいかやうにへる昔を人くい犬今は人くい犬
とふこと詞をはしめをんるるふ
かうなりて昔は人くい犬とふを人をくいける犬
やうなりをしちこうしに人の来るをいふ
をは今は人くいたりへるうたうし又業平昔日
野の口の紫草をつみ衣志めふのつくり様うさう志
もの也とうて乃みちのくの恋ふらむ者と任
也へりみてれをあしくふるくる古今は河原左
大臣の哥をか用むうへ此歌なく古今は
みちのくの恋ふらむ任也人とも思ふ我なるくる

廿三　西施

問云上古はいとゝ[illegible]事をい悉学ぬ
べきや昔は[illegible]学ぶへき方はう学ぶ南
き方有さ[illegible]別行要やさゝへい唐の越乃
国ふ西施といつる美人あり せいし 按んて
胸やみけるは むねを按へ眉をさつあけるは時
いとゝ顔のうるはしくやさしき美人
なるふりてや其隣の女ちてハ眉をさつの
め胸をおさへ色いうきちゝ成とんなてさやう
ゝせるゝ人ふはちゝ思ひ戸ぬして家ぬ
をたゝふりはをはうゝ

廿四　踏皮

一句の上下かけあるはゝ[illegible]ん事肝要なるへし
又七五の二句ぬ内ゝ上下ゝはをさ[illegible]れゝ
来ぬ五ゝはゝ上下ゝて上ぬゝ[illegible]ぬ
や上乃二句ふ[illegible]れハ来乃五文字をもゝく
ゝめ五七乃二句抱中持ゝ来のもみ字も
はるかゝむ事[illegible]をゝへハ行へしつる月を
文字ゝつはい二句の上下ぬ[illegible]ぬ
抱足を月や更りゝとせんハ句やくハりゝくさ
女房のゝき衣裳さてやちくゝゝるはゝ
[illegible]ゝはるはゝゝ

ねりとそむへき河原風ふき身にぬけめるといえん
も似合さへしさやうにあるべんに又六具ちしかるめ
うなるの名をしさ多ひ紙はさうなるをふへうに

廿五　猶子

取成連歌をかしもあるぬやうにすべきねし
さへ人のる紙やしるひて新るなるにと
我るさへうけもめひ世んつけに思ふまゝ事
新のるるさうふ相にないえんや人のるうん
のいそう大うるる作へんそひもはつへさや
をうへ別のる紙似うる事にあるして
付おそへん事おはそそに不て叶

蓑るさ角をたるもうし
云白よかる宿よ家ぬやまふ相ぬ俗
足に祇公の連歌や紙く吟味会く事
をえへ七重八重をいさけも山吹の
みの一つるなきをうるしさ

廿六　ゆう言葉

上手下手たに前るよせるるを作る事
に当の事やうに紙に理ぬたてのうさ
をもつく上ほうに理をそけそ作くたて
うに紙下ほや当へに分ぬうる紙かへん
よ西かけをさしてかくぬ凡そかへん

よたとゑ〳〵ものうく事
あるようりてかゆさもやまし

サヒ　扇の大小

同じ速音よ大小めせ音ゑ〳〵ハ扇のとよ
や答小ゑよ大をつけ大ゑ小をなめハ答合
ちぬゑ〳〵や前ゑ大ゑ〳〵ハ大ゑ小ゑ〳〵ハ小よ
付ゑをなよとてこうふへし〳〵ゑ扇を
おゑく風を用ゐんとすゑ時ハ扇くゑ〳〵きめ
風をゑ〳〵ゑんとすゑ時をこし〳〵ひ〳〵きて
ひふなり速音士のこゑゑ又如此付ゑよも
必おゑ小ふ〳〵ふへきやゑ　也高ならんおゑは

長ゑく有方人なゑんゑ方人強刀の体
よハ又ハ准之内ハをのゑ駒ゑかてをめ
師へよゑやて来てゑゑ白よぬむゑ高
ゑ扇のわゑ草と付ゑ〳〵ゑを大小ゑ
ゑ中ゑ〳〵ゑ〳〵や方ハ京詞のうハ如
ゑへゑ〳〵ゑやて来てゑゑ〳〵と強刀の体よ有ゑゑ
をよゑくやちゑゑてつけゑ〳〵ゑて折指せ
ゑ〳〵ゑなりねいうゑへ〳〵ゑ〳〵ゑ幸如
車言ゑゑゑゑくゑと是よ如今へうむゑゑ
されゑ〳〵や扇よつけて其外品有へし

廿八　三子のひま

初人の人なるべからけるゑ誠せんを之ゑ
髮乃生ずるせうこそや先賢らいう牛蛙
臂をたらし目をたゝして名人となり
そうこんを学ひて方丈新せん事乃
の魔障なるべし皮をはけ肉をそてこそ
骨よハいとゝあらのゑ猶道風のおもをかし
うかゝゝ

廿九　義乃外

古今古人の連歌おわるゝ也　世猶誠
わるゝもよりて連歌ゝ所ふも侵と

所要なるべし　さなき人ハそへハ義乃
内よりそゝる今孤業羅後綿緯みち
くゝれもきもせん食もそ義乃外
よをさそんうゝ

三十　打越

或ハ下句或ハ初句乃者上ふたさかりて
連歌をんせハ本上手ハ誠をせんと思ふ
をゆ人を上句ハ人をば不を世をつをん
も尾義をさよあゝ　ゝやゝし上句の打誠
をゝふをんをたゝるのハさりゝぬおなをを是
一乃秘事や

廿一 うけ縁

問云百韻連哥といふ物のなかにつくへきや芸
そこへも縁をうけなくてハまことにあるへきや
縁をとりくるにも浅きくに縁あるやうにかけ給を
又くわしきものやいふ菩薩に佛像となるへし聖人に
賢人を番させ山なとに枯木並立て名所さたむるに
ハ縁になとおもしろき縁をうけるへし山よりて
所落る人ハ成かてゝへしまことに連哥も
前句に寄合はなくてしく志つもほにつなき
むなしも縁深きやうに思ひて志けらぬ
答し百韻別くぬけなるやうにみ侍く

様にて何ハなれ寄しくまりきよつて附
このむ前句に付る人も是に同し

卅二 古躰の新み

当世の好士といふ人古よりて新き事を
仕出して人に奇特と思ハれんとて聞もなき様
ぬ詞をも作りなむけしくしき事なと云出しを
けしき俳しき事や先賢も何ハ新しさ
を先にして詞を古きをもちて作るといへり
又いにしへのなかの様ハ絶えて志くも志つもなれ
其にたしかなることを具も詞といつも我あるに
て志つも人然るはなるに口つまりて好むしき道也

ちむねをいはふへられ人はうちみちそて詞のを
ゆかしきは今姫ることよりもみえばらへ
るべし

廿三　紙衣乃下金

文質相兼て諸道まよ志つらへし為ゝへは
うさ小袖ゝ上下を着て忘かしあつきく
かふつ作つくる刀指て扇をたしなむ人の
衣くのも者ん布へ紙衣の下金をいしなる
をさくは見出へうらは為とへ又出るも似
合角うる紙衣の下金ハ指くる為りす
まて法度より様くるやうを好るおなし

ちるへし小袖にて下きるは文道ゝ不むらは
しくく実なきのことし能く思ひはかく候よも
目ふちも耳よふ何事の数正路乃儀不可有

廿四　下手猿楽

間云万論あられ庭にて弥さ為なと出来
せん時ハ見咲しるしてなひしふうさおちか
との出来せん時猿楽しひてはをのや普ふ
て能き丈猿楽は下手なれとも先祖とつゝく
作業場をは無間如神に恭徒猿勤をたのし
記せ今春又ちとも不て思又當場恵場をも
いもはまとのやちたくし小連歌士しる韻

ばらふかをへき所を心のゝ[illegible]へ[illegible]を
ゝ強取ゝ[illegible]のゝ[illegible]ぬ白ぬ出来をぬぬれ
面をゝゝ事必ぬぬぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]一なゝへし

廿五　堪責合戦

連ゝ寄ぬ籠曲をゝさい寄ハ[illegible]を[illegible]て
紀伊東ゝ又ぬぬを人合てゝむぬぬ[illegible]寄
列ゝゝゝ人ぬゝゝゝ[illegible]ゝ人の行ぬ
ゝのなれをぬを人ゝふゝ及油斷ゝゝふて付
ゝぬなりゝゝへハ寄ハ堪責をゝんゝさ
ゝゝ城の切岸ハ行てゝゝ[illegible]人の木を[illegible]
ぬゝゝぬぬ異めゝさ面ゝゝ打[illegible]ゝ

責ることゝゝ連ゝをあ出て合戦するゝゝ
籠曲此事ゝ行ゝ[illegible]ゝ丈を色ゝ

廿六　かつゝさ

水かつぬぬ指のなゝ[illegible]ふ行ゝをぬゝ入ゝ
渡ゝやゝゝゝゝんゝゝんゝゝ[illegible]ゝおゝゝゝ
て付刻を指を人者ゝ指をゝひゝんゝてあふ
入ふ人ゝ思ひ切て充ぬゝ[illegible]ゝ者
ゝゝゝゝゝゝ連ゝをゝ和人の付ハ人ゝ行ハ
籠ふんかゝゝてゝゝいゝゝんゝゝむゝと思ふ
斗ゝゝゝ年月をおゝゝんゝゝゝ思ひ切て
仕出へきゝのや又陰をゝゝふこゝなゝゝかゆ

あれもうかさそふいさみやあんをう
んとおもはるるしてめうなるばやうう
ようけもちふやむしまるし思ひてうけと
うさやぬかをかさもやむや 稲吉の上より
これんあんへしまる連歌るとんはぬまるば
を一度をせむしてうえきるや

廿七 露の糸乃水

白妙をてはうくはる而もるくさる掛けはる糸も
なくおりてもらもそこほりるくして
さうるうなんはるんはるへしをへは
立のさて露の糸をんはるるる玲瓏として

罪万八面仏のうるうりうんもくもてなるう
むうたうう

廿八 袋物

同工連歌を作るうは付なして色作るへ
きや若色て子をたる方ふをて前句より
合るうちめ作るて袋をめしるおはる
入れるかつをを入るる同し又おを忘
く芋をさぬふたるいふもそ尾
吳竹して始東宮中そちひる東行要や

廿九 稲月花殿上人

奇道の神たるくをおるいうふも路芋の

数人のみえうしてさしたる法はなきうぬ
の衣裳もあさましき栄華のいろてなを
くるしそうちさて月も際白のいろを
おかろる身なれとあまさうしり
つうれる道はしまいつはたへぬみ
しんるもせそしてこちそあらかとを
なるへし

四十　大佛の答刺

百丈いちらふかてるの法をとすといつ
されを大佛をつくり大きるるをつく
らむしるい為くの法をなしてをけり

さしむをうちそあるの大佛を作ん
とおるふのを斗いるを人の大殿をたてと
するもいうくの工叶ふ連子又ものを才
智を見そのほうをしてうるをむしし
安楽世界の人のいうなるをのうさを
つけるる事をもおるむらんとさんは
をりさを斗そて大佛をつくるをおとるを
をを

四十一　高人のをさ衣

連子ようさし事るれをさへを学文藝古
調らるも自得を所不るくは堪能のをさ人を
云うさし教家をも證不史他といつり禅家別傳

といへり奇道ふもなきこのこの人なるべきに
拙き商人のよき衣きてむい家ぬしいもも
かくし買ものあるいはやりてぬきて賣作べき
あなぬきや　古今集序よい文屋康秀
う歌の姿を商人のよきぬきばよそへ作り
色々を時作るとふしてこのそめくみなる
てきへ作る此人もかくふへきなり

四十二　苗をぬく

ちかいしに有るものの家田に苗をそそ
そくおくふまに胡麻ある田へ引て苗をぬき
きばるを抜るれるふらりてつぬる　枯作き

又を根原くしてそれをかくそふもいり
方道ふも女をたるあ作りてのれんるハ
いそへうに

四十三　大的

連射を射るを的を射るふ当ぬるなり
そ少へそ多へハ五人の的なれも又やあ
志り拙ハ或ハこえあるもハちりてうに
的をおのれ矢ハ射るきよくく
又合ばそを合てはいさ射へき目人肝
要や又大的連射と仔を射るもそ
きて分のおのれ有ち拙も上を下手に差別を

小眼よりうるはしあるものの人同や此境の
分別所要なり

人うゑてまちをふることなれ
あひよりふれ梅の梅さくく
此おのの言葉作りつくる花の咲くに
見ひらくなりても大概を作るも小
眼よりうるはしんれさとふ所一大事や
花よりもよりあふと色をもてよりて彩花のめつて
しまふ梅の咲ひ作ふをさいうとりや
いくひ法よ身をばおたくん
紅もるさ法乃加みるきりて

是もいくひ法乃ふあよ身をたりとふす
玄学之義の法加よ身をこの事ば作
作をよく相尚しやはきば紅ふさとふ
なり法乃字をそちめる事二をふ作
小眼よりうるはしるのもとりされや

此比況集宗長云為初学者取撰出や玄
宗代此道之為亀鑑考れ一覧之次今
書写訖

元禄三年庚午八月上弦

桑門西順

此一卷ハ予ガ作ル書ヲ今
昨是庵主人ニ乞テ畫ラシムルモノヤ

于時三月
癸卯初秋日

紀醉亭
吳雪